



大会にご参加いただき、誠にありがとうございました。
またのお越しをお待ちしております。

日本ジオパーク隠岐大会 (第4回日本ジオパーク全国大会)

日本ジオパーク隠岐大会 実行委員会

【事務局】〒685-8601 島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口24 隠岐ジオパーク推進協議会内

TEL:08512-2-9636 FAX:08512-2-9626

E-mail:info@oki-geopark.jp URL:http://www.oki-geopark.jp/

日本ジオパーク隠岐大会動画配信中

<http://jgn-conf-oki-islands.jimdo.com/大会動画/>

検索



日本ジオパーク隠岐大会

〔第4回日本ジオパーク全国大会〕

報告書

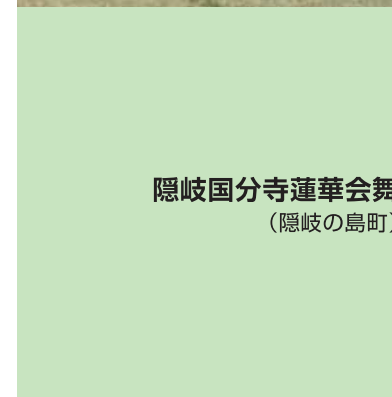
会期:2013年10月15日~18日 メイン会場:隠岐島文化会館



国賀海岸 摩天崖
(西ノ島町)



知夫赤壁
(知夫村)



隠岐国分寺蓮華会舞
(隠岐の島町)



明屋海岸
(海士町)



乳房杉
(隠岐の島町)



白島海岸
(隠岐の島町)

日本ジオパーク隠岐大会実行委員会



平成25年(2013年)10月15日(火)～18日(金)

日本ジオパーク隠岐大会

(第4回日本ジオパーク全国大会)

主なプログラム

15日(火)

- 14:30～
 - 開会セレモニー(会場：隠岐島文化会館)
 - ・主催者挨拶、来賓挨拶等
 - 日本ジオパーク新規認定地域認定証交付式
 - 日本ジオパークネットワーク功労者表彰
 - 第2回隠岐ジオパークフォトコンテスト「隠岐ジオパーク賞」表彰式

16:00～



「隠岐文化財とジオパーク活動」

講師：GONCE ユーゴ

ギーマルティニ(Guy Martini) 氏

「隠岐の歴史と文化」

講師：堀江孝典 氏

藤岡 大樹(ふじおかだいせつ) 氏

17:00～

○分科会①「首長セッション」

19:00～

○全体交流会(会場：レインボーアリーナ)

16日(水)

8:30～

12:00

- 分科会・大会関連イベント
- 分科会②「無形文化財とジオパーク活動」
- 分科会③「ジオパークガイドの交流・意見交換会」
- 大会関連イベント「自然公園とジオパーク」
- (環境省中国四国地方環境事務所主催)

(会場：隠岐島文化会館)

(会場：隠岐島文化会館)

(会場：隠岐の島町役場「ふれあいセンター」)

13:30～

15:00

- 隠岐の島町立北小学校、島根県立隠岐高等学校生徒によるジオパーク発表(会場：隠岐島文化会館)
- 分科会・大会関連イベント報告

17日(木)～18日(金)

- ジオツアー 事前に申し込みのあった参加者が隠岐島内のジオパークを巡ります。

- ※ 一般の方も、分科会及び17日～18日のジオツアーを除き、無料で大会にご参加いただけます。(15日の全体交流会は参加費が必要。)ただし、島外のジオパーク関係者を優先しますので、会場に余裕がない場合、お断りする場合があります。
- ※ 全体交流会への、一般参加を募集します。参加費 6,000 円。ご希望の方は下記のお問い合わせ先に、10月11日(金)までにお申し込みください。

お問い合わせ先 日本ジオパーク隠岐大会実行委員会事務局(隠岐ジオパーク推進協議会事務局) TEL: 08512-2-9636 FAX: 08512-2-9626 ホームページ: <http://www.oki-geopark.jp/>

※このシンポジウムは全面モニター放送を行う隠岐島からの放送局を受けて実施するものです。
この地域の市場に於いては、国土地理院の承認を得て、関係機関の許可を得た上で1週間前までに、本大会事務局(〒720-0001 島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口24)へお申し込みください。

大会概要



■ 名	称	日本ジオパーク隠岐大会
■ 会	期	平成25年(2013)10月15日(火)～18日(金)
■ 主	催	日本ジオパーク隠岐大会実行委員会、 財団法人自治総合センター
■ 共	催	日本ジオパークネットワーク(JGN)、日本ジオパーク委員会(JGC)、 海士町、西ノ島町、知夫村、隠岐の島町、海士町教育委員会、西ノ島 町教育委員会、知夫村教育委員会、隠岐の島町教育委員会
■ 後	援	総務省、経済産業省、文部科学省、環境省、島根県、島根県教育 委員会、日本地質学会、日本ユネスコ国内委員会、独立行政法人 産業技術総合研究所、島根大学、山陰中央新報社、BSS山陰放送、 TSK山陰中央テレビ、NHK松江放送局、エフエム山陰
■ 事	務	局
		日本ジオパーク隠岐大会実行委員会事務局 (隠岐ジオパーク推進協議会内) 〒685-8601 島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口24 TEL: 08512-2-9636 FAX: 08512-2-9626 E-Mail: info@oki-geopark.jp
■ メ	イ	ン
■ 現	地	審
■ JGN・GGN	事	前
■ JGN	会	員
■ 交	流	会
■ 分	科	会
■ 分	科	会
■ 分	科	会
■ 大	会	関
		連
		イ
		ベ
		ン
		ト
		会
		場
		隠岐の島町ふれあいセンター 2F (環境省中国四国地方環境事務所主催)



メインプログラム

10月15日(火)【メイン会場：隠岐島文化会館 大ホール】	
14:30～15:00 開会セレモニー	●アトラクション(隠岐民謡) ●主催者あいさつ 日本ジオパーク隠岐大会実行委員会 松田委員長／JGN 米田理事長 ●来賓あいさつ 島根県 溝口知事／JGC 尾池委員長
15:00～16:00 JGN認定式 フォトコンテスト 表彰式	●JGN認定証交付式 三笠、三陸、佐渡、四国西予、おおいた姫島、おおいた豊後大野、桜島・錦江湾 ●JGN功労者表彰／岩松 暉氏 ●第2回隠岐ジオパークフォトコンテスト「隠岐ジオパーク賞」表彰式
16:00～18:00 基調講演	●講演I GGNビューローメンバー ギー・マルティニーニ(Guy Martini)氏 ●講演II 松江歴史館館長 藤岡 大拙氏
17:00～18:00 分科会	●分科会①「首長セッション」 【会場：隠岐島文化会館 2F集会室】
19:00～21:00 全体交流会	●全体交流会 【会場：隠岐の島町総合体育館レインボーアリーナ】
10月16日(水)【メイン会場：隠岐島文化会館 大ホール】	
8:30～12:00 分科会	●分科会②「無形文化財を取り入れたジオパーク活動」 【会場：隠岐島文化会館 2F集会室】 ●分科会③「ジオパークガイドの交流・意見交換会」 【会場：隠岐島文化会館 大ホール】
9:00～11:45 大会関連イベント (環境省中国四国地方環境事務所主催)	●「自然公園とジオパーク」 【会場：隠岐の島町ふれあいセンター 2F】
13:30～14:00 ジオパーク発表	●地元小学生、高校生によるジオパーク発表
14:00～14:30 分科会報告	●分科会・大会関連イベント報告
14:30～15:00 閉会セレモニー	●大会宣言 ●次回全国大会開催地PR

10月15日(火)・10月16日(水) 両日開催	
●ポスター展示・ブース展示【会場：隠岐の島町立武道館】	●物産販売【会場：隠岐島文化会館 エントランス周辺】

ジオツアー

特設コース		Dコース(島後2日間)		Dコース(島後2日間)	
10月17日(木)		10月17日(木)		10月17日(木)	
1号車(36名) ジオガイド 林 広樹、平田 正礼		1号車(21名) ジオガイド 八幡 浩二、前川 文吾		2号車(21名) ジオガイド 斎藤 一志、村上 久	
8:20～ 8:30	文化会館集合	8:20～ 8:30	文化会館集合	8:20～ 8:30	文化会館集合
9:00～ 9:20	銚子ダム	8:50～ 9:20	隠岐自然館	9:20～ 9:50	白島展望台
9:50～10:20	白島展望台	9:40～10:00	玉若酢命神社	10:20～10:50	久見海岸
10:50～11:20	水若酢神社周辺	10:40～11:10	奥津戸海岸	11:10～11:40	福浦トンネル
11:30～12:10	昼食(五箇公民館)	11:40～12:10	壇鏡の滝	11:50～12:30	昼食(海音里)
12:40～13:00	玉若酢命神社	12:30～12:40	那久岬	13:00～13:20	油井の池
13:30～13:35	隠岐空港着	13:20～14:00	昼食(海音里)	13:40～14:00	那久岬
13:55～14:00	西郷港着	14:10～14:40	福浦トンネル	14:20～14:50	壇鏡の滝
14:00～14:30	隠岐自然館	15:00～15:30	久見海岸	15:20～15:40	奥津戸海岸
15:10～17:35	西郷港発フェリー 七類港着	16:00～16:30	白島展望台	16:10～16:40	玉若酢命神社
15:15～16:10	隠岐空港発 伊丹空港着	17:00～	金峰荘+しまじ	16:50～	金峰荘+かじたに
2号車(35名) ジオガイド 斉藤 正幸、山内 靖喜		10月18日(金)		10月18日(金)	
8:20～ 8:30		ジオガイド 八幡 浩二		ジオガイド 斎藤 一志、前川 文吾	
8:50～ 9:20	文化会館集合	8:30～ 8:45	ホテル(金峰荘)発 ホテル(しまじ)発	8:30～ 8:45	ホテル(金峰荘)発 ホテル(かじたに)発
9:40～10:00	玉若酢命神社	9:10～ 9:40	久保呂海岸(マントルゼノリス)	9:05～ 9:15	銚子ダム
10:30～11:00	銚子ダム	10:10～10:30	乳房杉	9:55～10:15	トカゲ岩
11:30～12:00	白島展望台	11:20～11:50	トカゲ岩	10:55～11:15	乳房杉
12:20～13:00	水若酢神社	12:20～13:00	昼食(中村海岸)	11:45～12:25	昼食(布施支所または浄土ヶ浦)
13:30～13:35	隠岐空港着	13:20～13:40	銚子ダム	12:55～13:25	久保呂海岸(マントルゼノリス)
13:55～14:00	西郷港着	14:05～15:10	隠岐空港經由西郷港着 自由行動	14:05～15:10	自由行動
14:00～14:30	隠岐自然館	15:10～17:35	西郷港発フェリー 七類港着	15:10～17:35	西郷港発フェリー 七類港着
15:10～17:35	西郷港発フェリー 七類港着	15:15～16:10	隠岐空港発 伊丹空港着	15:15～16:10	隠岐空港発 伊丹空港着
15:15～16:10	隠岐空港発 伊丹空港着				

ジオツアー
の感想

- ・台風の影響で当初のツアーコースを回れませんでした。急遽特設コースを設けていただき隠岐を楽しむことができました。
- ・隠岐ジオパークの資源の豊富さとともに、ガイドのみなさんのレベルの高さにびっくりしました。
- ・隠岐の資源とガイドを堪能いたしました。
- ・島前をどうしても見たくて大会終了後行ってきました。雄大な風景に感動しました。
- ・もう一度、ゆっくりと訪れたいです。
- ・ジオツアーでは初めて聞くことばかりで、これまで持ってた隠岐の印象がまったく変わりました。



協賛企業のジオパーク関連展示



物産販売



ギー・マルティニ氏としまねっこ(島根県観光キャラクター)との記念撮影



交流会場内の様子



環境省パネル展示



オープニング(隠岐民謡 しげさ節)



郷土料理のふるまい



尾池委員長による俳句の解説



もの作り体験



ブース展示



歓談の様子



アトラクション(隠岐太鼓)



メイン会場内の様子



巨大ワニの骨格復元図の説明



アトラクション(隠岐民謡 しげさ節)



主催者・来賓による鏡開き



島後から島前をのぞむ(那久岬)



独自のDNAを持つ隠岐杉の展示(隠岐自然館)※強風により折れた枝を展示しています。



2億5千万年前に形成された隠岐片麻岩の露頭(銚子ダム)



マントルゼノリス等、種々の岩石を観察(久保呂海岸)



土木学会が選ぶ土木遺産のひとつ、手掘りの福浦トンネル



隠岐で見られる不思議な植生分布を観察(奥津戸海岸)



大会メイン会場前に集合



松田 和久【日本ジオパーク隠岐大会実行委員会 委員長】

JGC委員並びにJGN会員、準会員、協賛会員、一般参加の皆様、ようこそ隠岐においでくださいました。本日より4日間の日程で第4回となる日本ジオパーク全国大会をここ隠岐で開催できますこと、皆様のご理解とご協力のおかげと感謝しております。また、去る9月9日、韓国チェジュ島で開催されたアジア太平洋ジオパークネットワーク国際会議において、隠岐ジオパークの世界認定が発表されました。これもひとえに、皆様のご助言、ご支援の賜であり、この場をお借りしてお礼申し上げます。さて、現在、GGN加盟地域が世界29カ国で100地域、JGN加盟地域については認定地域が32地域、準加盟が15地域の合計47地域となりました。国内外において、ジオパーク活動に対する関心がますます高まってきていることの現れであると考えています。今回の大会は、関心、注目がいやがうえにも高まっている、今後のジオパークのさらなる発展と、各ジオパークの活性化を目的に開催するものです。大会期間中、大いに意見交換を行っていただき、ジオツアーでは隠岐世界ジオパークの見どころを地元のガイドがご説明します。また、隠岐は海産物やお酒をはじめとしたおいしいものがたくさんあります。この機会にぜひご賞味いただいて、隠岐を堪能していただきたいと考えています。行き届かない部分もありますが、期間中、隠岐世界ジオパークをお楽しみいただき、実りある大会となりますよう、祈念しましてご挨拶とさせていただきます。



米田 徹【特定非営利活動法人 日本ジオパークネットワーク 理事長】

第4回JGN全国大会隠岐大会の開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。2007年に、ジオパークを目指す13の地域で日本ジオパーク連絡協議会を設立し、2009年には、現在のJGNを設立いたしました。わずか数年で、日本におけるジオパーク活動は急速に広がり、現在、全国1,719市町村の内、158がJGNの構成市町村となっています。検討中の地域を加えれば、その数は軽く10%を超える状況です。長期にわたる景気低迷や少子高齢化に伴う人口減少などの社会問題は地方において特に顕著であり、これを解決するための持続可能な地域振興や経済発展は、地方自治体の最重要課題となっています。このような背景から、ジオパーク活動の地域活性化ツールとしての有効性が認識され、関係者の積極的な活動により全国に展開されたものと考えております。去る9月24日に、新たに7つの日本ジオパークが誕生しました。大変喜ばしいことであるとともに、関係地域の皆様には心からお喜びを申し上げます。我々のJGNは、多くの皆様のご支援ご協力によって、これまでの活動を進めてまいりました。あらためて感謝を申し上げるとともに、今後もこのネットワークを最大限に活用したジオパーク活動を展開し、新たな価値創造を積極的に行う使命があると認識しております。このために、全国のジオパーク関係者が一堂に会し交流を行うことは大変重要なことであり、今後の活動に対して有意義な機会となるよう大きく期待をしております。大会期間中は、テーマ別の分科会や国内6番目に世界ジオパークとなった隠岐地域のジオツアーなどが計画されておりますので、皆さまには、ぜひ、日頃の活動で感じられている様々な思いなど忌憚なく情報交換をされ、またお楽しみいただきたいと思います。終わりに、関係者の皆様には、本大会の開催にあたり、多大なご尽力を賜りましたことに感謝を申し上げますとともに、本大会が有意義で実り多いものとなるようご来場の皆様からのご協力をお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。



溝口 善兵衛【島根県知事】

本日、日本ジオパーク全国大会が、ここ隠岐で、盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。さて、現在、日本ジオパークの認定地域は、28都道府県、32地域となり、準会員を含めると33都道府県、47地域となりました。地質遺産を核として、各地域の特色を活かした取り組みが全国に広がってきています。先月9日には、隠岐ジオパークが世界認定を受け、国内で6番目の世界ジオパークとなりました。このような中、隠岐で全国大会が開催されますことは、時機を得たものであり、うれしい限りです。島根は、荒神谷遺跡の銅剣、加茂岩倉遺跡の銅鐸に代表される「銅」、たたら製鉄の「鉄」、石見銀山の「銀」と、鉱物の産地として長い歴史があります。その出発点とも言えるべき鉱物が、隠岐の「黒曜石」であります。今大会の後半には、ジオツアーが予定されております。貴重な地質遺産を基盤とする、美しく、不思議な隠岐の自然や、旧石器時代から連続と受け継がれてきた歴史文化を、ご堪能いただければと思います。本大会が、日本ジオパークの各地域の発展に寄与し、貴重な地質遺産の保全と活用に向けて、有意義な大会となることをお祈り申し上げます。終りに、開催にご尽力いただきましたJGCをはじめとする関係の皆様は心よりお礼申し上げ、またご参加の皆様の益々のご健勝を祈念しまして、お祝いの言葉といたします。



尾池 和夫【日本ジオパーク委員会 委員長】

JGCを代表して、開催にあたりお祝い申し上げます。4回目となる全国大会を、世界ジオパークに認定された隠岐で開催されますこと、すばらしいことと思います。改めて、隠岐が世界ジオパークに認定されたこと、お喜び申し上げます。世界ジオパークは100箇所となりましたが、世界遺産は980余りであり、世界ジオパークはまだまだ少なく、また認定地域も偏っています。隠岐もGGNの仲間入りを果たしたこと、これからはGGNの活動を世界に広めていくという大きな役割も持つことになります。大いにがんばってほしいと思います。日本ジオパーク認定地域は32地域になり、2008年にはじまった日本ジオパークの取り組みも軌道に乗ってきました。2004年に山陰でジオパークを取り上げた地質の会議ははじまりですが、ここ1年分の全国紙のデータベースを、ジオパークをキーワードに検索してみたところ、3,650件の記事が出てきました。ずいぶん早く大きく成長したと思いますが、これもひとえに皆様のご尽力のたまものと感謝します。今回の大会には、全国からたくさんのガイドの方がいらしていますが、交流を深めるだけでなく、他のジオパークと行き来しあう、そうした交流を深めるきっかけとしてほしいと思います。そうした交流を繰り返すことで、ジオパークを支えるガイドの質が向上していくものと期待しています。いろいろな活動が皆様の役割となっていますが、皆様のますますのご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶といたします。



平成25年9月24日に日本ジオパークネットワークへの加盟が認定された7つの地域に、日本ジオパークネットワーク米田理事長と日本ジオパーク委員会尾池委員長から認定証が授与された。

尾池委員長講評

新たに日本ジオパークに加わった7地域に認定証をお渡しした。これで日本ジオパークネットワークは32地域となった。ネットワークのメンバーとして、交流を深めてもらいたい。認定証とともに、各々のジオパークの宿題もお渡しする。4年後の再審査に向けてのジオパーク活動の参考にしてほしい。認定の7地域の皆様、本当におめでとうございます。



新規認定地域の紹介

※紹介文は日本ジオパーク委員会による認定公表時の報道発表資料から抜粋。

三陸ジオパーク

三陸の大地は地球史を語る上で欠かすことのできない、およそ5億年前まで連続的に遡ることのできる大地の記憶が眠る場所である。そして、東北地方太平洋沖地震・津波をはじめとする、震災の記憶を後世に伝え学ぶジオパークである。津波災害を直接的に伝える震災遺構、見事なリアス海岸や段丘地形、豊富な鉱産資源や世界屈指の好魚場で育まれた豊富な海産物など、大地の生い立ちと深く関わってきた三陸の人々の暮らしぶりも魅力である。



三笠ジオパーク

アンモナイト等の化石や石炭、断層変位地形など北海道の大地の生い立ちを体感できる見どころが多くある。また、日本を代表する炭田であった石狩炭田の炭鉱遺構群、炭鉱とともに歩んだ文化や鉄道など、石炭とともに歩んだ人々の歴史に触れることが出来る場所でもある。



佐渡ジオパーク

日本海側最大の島である佐渡は、島の形成史と生態系や歴史・文化のストーリーが魅力的である。世界文化遺産の登録を目指す「金を中心とした佐渡鉱山の遺産群」や、世界農業遺産(GIAHS)に国内で初めて登録された「トキと共生する佐渡の里山」をはじめとする、特徴的なジオ多様性を見ることが出来る。推進活動では、特に学校教育、社会教育における取組と調査・研究活動が進んでいる。



四国西予ジオパーク

当地域は、日本列島の地質の成り立ちの謎を解く鍵のひとつとなる、4億年以上前の地層や岩石を含む「黒瀬川帯」という西日本に帯状に分布する地質体の研究が最初に行われた地である。西予市の地形は、東西に延びる黒瀬川帯とそれに沿って細長く続く各種の地層・岩石の影響を受けてできている。こうした地形・地質が各種ツアーに活用されはじめている。また、ジオパークになる前から地域の活動への住民の参加意識が高く、大学との連携もおこなわれている。



おおいた豊後大野ジオパーク

約1億年前の地層群を貫くマグマがつくった祖母山の美しい景観や、9万年前の阿蘇火山の巨大噴火があったからこそ生まれた滝や棚田群、井路、石橋群、磨崖仏など、巨大噴火と人々との関わりが体感できる。郷土愛あふれるガイドの解説を聞けば、神楽や獅子舞などの独自の文化がこの地で培われてきた背景に触れることができる。



おおいた姫島ジオパーク

国東半島の沖に浮かぶ7つの火口跡を持つ島で、西日本各地の考古遺跡で出土する石器の主産地である黒曜岩の断崖(国指定天然記念物)がある。海蝕崖や多様な地層が観察できる事も特徴である。地層は大きく褶曲し、瀬戸内海が陸地であった頃の名残である旧ゾウの化石、藍鉄鉱などが産出する。集落は主に砂州に立地し、火口跡や塩田跡地を活用した車えびの養殖と沿岸漁業が基幹産業である。



桜島・錦江湾ジオパーク

桜島・錦江湾ジオパークでは、住民は火山活動の影響を受けながら、桜島を強く意識して生活している。現在まで、長きにわたる火山との共生により育まれた個性的な歴史や生活文化等を反映したサイトは、自然科学的なサイトとともにエリア内に豊富にあり、それらを活用したツアーなどのアクティビティがすでに展開されている。ガイド付きツアーで複数のジオサイトを巡ることでメインテーマである「火山と人と自然のつながり〜海まで広がる活火山の営みと都市の共存〜」を体感することができる。



フォトコンテスト入賞作品表彰

第2回隠岐ジオパーク フォトコンテスト 「隠岐ジオパーク賞」表彰

大会では、第2回隠岐ジオパークフォトコンテスト(主催/隠岐観光協会)応募作品のうち、3者の作品を「隠岐ジオパーク賞」として表彰した。

3者の作品とも、「隠岐世界ジオパークの地形・地質等をとらえている。」「隠岐世界ジオパークの特徴である、「大地の成り立ち」「独自の生態系」「古代から続く人の営み」の3つの関連性をとらえている。」点が高く評価された。



優秀賞

「滝越しに見上げた空」
小林 さき子さん(隠岐の島町都万)



特賞

「日灯る」
川井 由美恵さん(西ノ島町美田)



優秀賞

「三者三様ならぬ五馬五様」
武嶋 美咲さん(境港市高松町)

功労者表彰

日本ジオパークネットワーク 功労者表彰



岩松 暉氏(写真中央)

鹿児島大学名誉教授、静岡大学客員教授、
(公社)鹿児島県地質調査協会理事、(株)建設技術研究所顧問、理学博士

大会では、日本ジオパークネットワークが国内での普及活動に多大な貢献があったとして、岩松暉氏を功労者表彰した。

会場では次のとおり紹介された。

2004年4月に設立された特定非営利活動法人地質情報整備・活用機構(通称GUPI)の会長としてジオパークの調査を進め、関係学会や外務省等との調整役として奮闘されてきた。

2007年10月のジオパーク連絡協議会発起人会及び、同年12月の日本ジオパーク連絡協議会設立に大変な尽力をされ、この協議会の事務局長も務められた。

以降、2009年5月に現在の日本ジオパークネットワークが設立されるまで、ウェブサイトやメーリングリストの開設・管理を行い、また、これらの活動資金が不足した折には、ご本人のポケットマネーで活動を支えられるなど、正に今日の日本ジオパークネットワークの礎を築いてこられた。



日本ジオパークネットワーク功労者講演 講師／^{いわまつ}岩松 ^{あきら}暉 氏



日本ジオパークネットワークの斎藤清一事務局長から、「この頃、ジオパーク認定が自己目的化している向きがあるから、初心に帰らなければと痛感している。ついては事始めと初心について話をしてくれ。」と頼まれたので、すこしばかりお話ししたい。

ジオパークは2002年の地質科学国際研究計画(IGCP)科学理事会決議から正式にスタートしている。日本学術会議IGCP小委員会波田重熙委員長がそのオープンセッションに参加されて情報を得、山陰で活動を始められていた。しかし、全国的な動きになったのは2004年NPO地質情報整備活用機構(GUPI)が設立されてからである。同年6月、北京で第1回ジオパーク国際会議が開催され、参加はできなかったが講演要旨集を入手することができたため、概要をGUPI Newsletter7月号に載せるとともに、ホームページを作成した。この頃はまだ「ジオパーク」ではなく、「geopark」と原語のまま使っていた。その後、geodiversityの訳語をめぐる論争があり、カナ書きで決着した。ジオパークも多分野の協力を得たいのでカナ書きとすることにした。

さて、どうやってジオパークを作ったら良いか見当がつかない。Parkだからまず自然公園を管轄する環境省だと思い、2004年8月のお盆に事務次官を訪ねた。日本ユネスコ国内委員会は文部科学省にあり、地質は経済産業省、観光は国土交通省の所管である。その他文化庁等々、関係各省には話を通しておくようにとのアドバイスを得た。このようにジオパークは数多くの省庁に関わりがあるが、お互いに模様眺めで自ら動こうとせず苦労した。しかし、逆の視点から見れば、全部の省庁の協力を得られるということでもあった。

官庁はともかく、まず何よりも、足下の学界を固めることが先決。お盆の後、産業技術総合研究所に行き、幹部にお願いしたところ、幸いにも快諾され、ユネスコのことから、当時国際主幹だった渡辺真人さんが担当となった。こうしたいきさつで渡辺さんがジオパークに関わるようになった。日本地質学会等々の関連諸学会の全面的な協力も得た。次のステップは社会への発信。講演会を開いたり、講演行脚で全国を回ったりした。PRの一助と思って「日本列島地質百選」など、あの手この手をやってみた。

しかし、広く知ってもらうためには、やはりメディアを動かすことが重要。最初に朝日新聞科学欄が取りあげてくれ、すぐに東京新聞が興味を持ち、見開き2ページオールカラーのサンデー大図解「日本の地質遺産」を作ってくれた。同様の大図解が中日新聞、北海道新聞、西日本新聞などにも載った。これが一大ブレイクのきっかけとなり、地方からの問い合わせが相次いだ。

「中央省庁が三すくみ四すくみなら地方が連携して攻め上(のぼ)ろう」と米田糸魚川市長さんと馬場新温泉町長さんがおっしゃり、2007年10月に発起人会を開き、12月には日本ジオパーク連絡協議会が結成された。

地方が結集したら、その半月後の2008年1月にユネスコを管轄する外務省が中央省庁連絡会議を招集してくれた。

一方、審査機構の準備も必要。親しくなった官庁から、「条約でない以上、直接官庁が所管できないので、日本もNGOでどうか。権威のある審査機構も組織して欲しい。それと、政治介入だけは絶対阻止しないとダメだ。一つでも裏口入学を認めたら、このプロジェクト全体が瓦解する。」と言われた。中央省庁は全部オブザーバーとして列席し、決定事項は外務省がユネスコに取り次ぐという第三セクターのような日本型NGOにすることにした。

権威のある審査機構で思いついたのが、当時、京都大学総長だった尾池和夫さん。「この先生は悪い人や、人使いが荒い。」などと言われたが、快諾していただいた。政治介入を防ぐために、委員はアカデミア中心に構成し、審議過程は全部公開して透明性を確保することにした。

話を交えて、初心、私の胸の思いだが、煎じ詰めると、地と人と地方の3つである。

1つめは「地」。2004年にインド洋大津波があった。津波「Tsunami」は英語になっている。地震の後、地震国の日本人が悠然とビデオカメラを回していた。「ツナミだ!」と叫んで逃げたら、それだけで通じるのだから、多くの命を救えたであろう。一方、津波のないイギリスの少女が津波の危険を母に知らせ、ホテル従業員を避難させたという。こんな事で良いのか、日本列島は災害列島なのだから、地学を国民教養にしなければならないと強く思った。2つめは「人」。国立科学博物館の「縄文時代の手厚い介護」という展示に強い衝撃を受けた。解説文には、生まれながら寝たきりの小児麻痺児が手厚い介護により天寿を全うしたとあった。あの狩猟採集の時代である。大地の子・縄文人は優しくったのだ。ところが現在はどうか。飽食の時代と言われているのに、親殺し・子殺し・虐待など耳を覆う話ばかり。一億総都会人になって感性が麻痺したのではないか。やはり、子供たちを自然の中で心豊かに育てたいと強く思った。

3つめは「地方」。今の地方は疲弊しきっており、中央の踏み台だ。真の意味の地方主権を実現する必要がある。だからこそ、ジオパークのガイドラインで地元で持続可能な確固たる運営組織があること、という項目の比重が一番大きいのだ。ジオパークには「踏み出せ、汗出せ、知恵を出せ」の三出せが不可欠と思っている。この三出せで育った子供たちは、きっと地元で定着するのではないかな。

最後に、ジオパークの設立・運営に当たった留意点について。2008年に糸魚川ジオパーク推進市民の会設立総会で「5つのキーワード」という話をしたことがある。要は「民主導」「人こそかなめ」「一時的ブームに終わらせない」「協力協働」「郷土愛とおもてなし」の5つである。今でもそう思っている。



「隠岐の歴史と文化」講師／^{ふじおか}松江歴史館館長 藤岡 ^{だいせつ}大拙 氏



古事記には、隠岐は「隠岐の三子州(みつごじま)」と書かれ、本土よりも早い、日本で3番目にできた島とされている。隠岐は島前の西ノ島、中ノ島、知夫里島と島後の4島からなるが、なのになぜ「三子州」と書かれているかについては諸説ある。ひとつ目は、島後から見た島前3島という説、本土から隠岐を見た場合、角度によっては3つに見えるという説、日本書紀には、佐渡と隠岐は4番目に双子で生まれた島とされており、残りの島前3島を指して三子という説など。

いずれにせよ、本土より早い、3番目にできたという記述は、古事記の編纂者や大和朝廷の、隠岐に対する印象が強く働いたものであり、ひとつには黒曜石の産地であったこと、一説にはシベリアにまで輸出されたとも言われている。このように昔はすごい島だった。もうひとつは日本海ルート、たとえば朝鮮半島と、出雲などの中継地点として大事な位置にあったことが印象強かったと思われる。従って隠岐は、歴史上たいへん重要な島であった。

『出雲国風土記』の冒頭では、「国引き神話」が書かれている。国引きにより、プロト出雲を大きな土地にしたというダイナミックな神話である。その際、4回にわたって土地を引っ張ってきたとある。1回目は新羅、今の韓国、慶尚南道あたりから引っ張ってきた。2回目が今の海士町崎地区から、3回目は島後の東郷あたりから引っ張ってきた。4回目はもう近くに土地が余っていなかったの、能登半島の珠洲地区から引っ張ってきた。今の島根半島の東端の美保関になったとされている。

4回のうち、2回にわたって隠岐から引っ張ってきたことから分かるように、隠岐は神話に彩られた土地といつてよい。

この隠岐が歴史上に具体的に登場してくるのが、724年(神亀元年)であり、律令に流刑地として出てくる。律令時代の刑罰は5刑あり、笞(ち)、杖(じょう)、徒(ず)、流(る)、死(し)があり、流にも近流(きんる)、中流(ちゅうる)、遠流(おんる)の3種類があり、遠流の地に伊豆国、安房国、常陸国、佐渡国、土佐国とともに隠岐国が指定された。遠流の地には刑事犯は流さず、政治犯を流した。どういった者が隠岐に流されたかという点、藤原原雄(ふじわらのよしお)や小野篁(おののたかむら)など上級官僚、武将、公家などである。小野篁は隠岐でも有名であるが、この人は遣唐副使に任命されたが、正使の船が壊れてしまい、副使の船と強制的に交換させられてしまった。このことに小野篁が怒ってしまい、とうとう乗船せずに、遠流の身となり、隠岐にやってきた。比較的早く赦免となり、隠岐にいたのは足かけ3年ほどだったが、都人が隠岐に来ることは、本人にとっては大きな打撃であったと思われる。しかしあちこちに彼を慰めてくれる女性がいたとの伝承もある。

そのほかにも高位の人たちが流されたが、極めつけは後鳥羽院(後鳥羽上皇)と後醍醐天皇である。後鳥羽院は在島19年、実に悲しい生涯を

送られたとされ、歴史家や文学者は絶海の孤島に流され、あばら屋に住まれ、痛ましいことといった表現をするが、「遠島百首」という歌集を作ったり、伝承ではあるが牛突きを楽しまれたりしたそうだ。その牛突きを誰が御覧に供したのかということには、歴史家は誰も気がつかない。

上皇が隠岐に来て歌を作ったり、念仏を唱えたりといったことができたのは、隠岐の人の優しい心根に支えられたから、と評価できる。

私は、上皇が絶海の孤島でさびしく亡くなったという評価はできないと考えている。

この9人をはじめとして、公家や僧侶などが流されたことで、隠岐に都の雅な文化が伝わった。

具体的には分かっていないが、たとえば伝統芸能として、隠岐国分寺に伝わり、国の重要無形民俗文化財に指定されている「蓮華会舞(れんげえまい)」がある。この「蓮華会舞」をはじめとして、隠岐では「風流(ふりゅう)」という、都の流れを汲む祭りが神社に残っている。

もうひとつ、隠岐の言葉には都の言葉が残っているといわれる。たとえば井原西鶴の『好色一代男』では、「八雲立つ国(出雲地方のこと)の男女、ことば文(あや)切れせぬこと、とみに多し。」とあり、要するに出雲の国の人の話す言葉は分かりにくいと言っている。これに比べて、「離れ島の隠岐の国の人々、そのかたちは鄙びたれども、もの言いは都の人に変わることなし。」といている。さらには、囲碁、香道、歌の道を志す女性もいると書いており、実に雅な文化を持っていたことが伺われる。

中世まではこうした政治犯ばかりだったが、江戸時代に入ると、一般の刑事犯も流されてくるようになる。隠岐ではこの罪人を、「放ち捨て」といって、牢屋に入れるのではなく、村々で受入れ、しかも村人と同じ生活をしながら、だんだん矯正して真つ当な人間に立ち直らせようとしている。ここから隠岐の人の心根がわかる。

明治25年に小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が来島している。『知られざる日本の面影』に「伯耆から隠岐へ」という章があり、隠岐について書かれている。まず西郷に入るが、船上からの島なみや焼火山(たぐひさん、西ノ島)の風景に、西洋とは異なる、「不ぞろいの美」を日本の美の凝縮として隠岐に見出している。

西郷の感想を、「今まで訪れた日本のどんな土地よりもここ西郷ほど居心地のよいところはない。」とべた褒めしている。この西郷では、「洋食がよければランチをだしますよ。」といわれたことも書かれており、明治25年には西郷にも洋食を出せるコックがいたことになり、西洋化が進んでいたことがわかる。しかし、本土の西洋化ほど進んでおらず、こうしたところも小泉八雲が隠岐を気に入った理由だろう。

この島が世界ジオパークに認定されたことをたいへんうれしく思う。



「無形文化財とジオパーク活動」

講師／GGNビューローメンバー ギー・マルティーニ (Guy Maritini) 氏



まず最初に、隠岐ジオパーク、島根県そして日本ジオパークの関係者の皆様に対して、この大会にお招きいただいたこと、お礼申し上げます。この素晴らしい大会に参加でき、うれしく思う。JGNの活発な活動を肌で感じている。

さて、ジオパーク活動の経緯であるが、1991年にフランスで最初の地質遺産の保全に関する会議が開催された。ここで「地球の記憶」(earth memory)の考え方が提唱され、ジオパークの基本的な概念が示された。これがジオパークの幕開けといつてよい。

続いてジオパークの世界的な取り組みがヨーロッパ、特にフランス、ドイツ、ギリシア、スペインの4カ国をまたがるプログラムとして発展した。これが2000年のユネスコの支援によるヨーロッパジオパークネットワーク(EGN)につながった。2004年には世界ジオパークネットワーク(GGN)が、2006年にアジア太平洋ジオパークネットワーク(APGN)が発足した。

現在では、58地域からなるEGN、49のAPGNそして3つの南北アメリカ大陸のあわせて100の地域が世界ジオパークに認定されている。

さて、ではなぜ「ジオパーク」という言葉を使っているかという、まず有史以来、景観や地質の構造といったものが、古代の人々を魅了し続けてきたのであり、古代の人々はこのような土地に対して宗教的な観念を抱いていた。

富士山の例をとれば、7世紀以来、気高いものとして日本人の心の中に生きてきた。この神聖性と地質の関連は、古代の人々の考えを見ることができる。(スライド写真のような母性を表現した)土偶、装飾品などはいわゆる大地の母、女神といったものに奉げられたものだ。ギリシ

ア神話では母なる大地をガイア、ゲオ、ジオという言葉で表している。全能の神ゼウスの祖母は、母なる大地、ガイアと呼ばれている。ローマ文明にも、母なる大地はテルウス、テラマーテルなどの言葉で、ガイアと表現されている。すべての先史の文明は、このように、地球・大地と神聖さに関連性がある。

ジオという言葉はいろいろな分野で使われている。幾何学、地理学、測地学、地球物理学、地質学などの言葉に冠されている。ジオパークという名前はこうした様々な'geo'に由来しており、単に'geology'に由来する言葉ではない。つまりジオパークとは屋外の地質学的な展覧場ではなく、ひとつの土地であって、もちろんそこには国際的な地質遺産を含むものではあるが、それだけではなく、文化遺産などのもっと強い関連が「地球の記憶」として存在する場所なのである。

これからスライドで各地のジオパークを紹介する。(省略、大会動画(本報告書最終ページにリンク先を記載)を参照のこと。)

2011年にEGNにおいて、無形文化遺産に注目し、守っていくためのワーキンググループが新たに結成された。これは地質遺産のストーリーと消滅の危機にさらされている無形文化遺産をつなげ、無形文化遺産を守り、盛り立てていくという取り組みだ。

無形文化遺産というものは日本にもその概念がある。1950年に文化財保護法を施行し、有名な寺院などを文化財に指定した。2008年にはユネスコにおいて世界の無形文化遺産のリストを作る作業が始まった。

無形文化遺産とは何か、という、普通5つのカテゴリーに分けている。まずひとつは「口承」。例として紹介するのは、糸魚川ジオパークのもの

である。昨年7月、私も行ってきたが、住民が集まって、民謡や昔語りを持ち寄り、それを若い人に伝えていく活動をしていた。これから数年間、こうした民間伝承を地質学的な遺産とつなげていく活動をしていく、とのことである。

2つ目は「芸能」。芸能とは、舞踊や演劇、パントマイムなどがある。スライドで示したものは、イタリアのシチリア島のものである。ここはマドニエジオパークで、13世紀からの人形劇のオペラがある。現在はこのような伝統的な人形劇を用いて、現代的な社会問題を扱う劇を上演している。

3つ目は「社会慣習、儀式、祭礼行事」である。日本にもたくさんの事例があるだろうが、スライドで示したものは、地中海諸国のものを示している。スライドでは食事を作って振舞っているが、ユネスコの無形文化遺産である食事を通じた調理方法、食事方法や地域社会とのつながりを、ジオパーク間で共有しつつある。

4つ目は「自然及び万物に関する知識及び慣習」というものだ。ひとつの例は韓国のチェジュ島である。スライドは年のうちで特別な行事として行われる舞踊である。これは海と月のつながりを祀るものとして行われる。次の例は隠岐ジオパークのものであり、十方拝礼(しゅうはいら)といわれるもので、神道に由来するものであるが、国の無形文化財に指定されていると聞いた。

5つ目は「伝統工芸技術」で、これも衣装や芸能とも関連しており、これらの道具や収納用具にも用いられることがある。スライドは中国の寧徳ジオパークで、50メートルに達する木造の橋を伝統的な技法で作っている。

無形文化遺産の世界的な基準を定め、実践するために、2011年に実験的なワーキンググループを立ち上げた。このグループは、主に次の3つの方向性を定めた。

ひとつ目は、先ほどから説明しているとおり、無形文化遺産のリスト作りである。

2つ目はジオパーク内の、人間宝のリストを作ること、3つ目は宗教の聖地のリストを作ることである。

人間宝とは、これも日本が端緒となっているが、1950年に、宝とすべき人間を人間国宝に認定することを始めた。これはすなわち、無形文化遺産の特定分野に活躍したまたは引き継ぐために必要な知識や技術を持つ人を探し出し支援していくことである。そして日本の取り組み倣って、他の国でも人間宝の取り組みが始まっている。韓国、フィリピン、フランスなど。1998年にはユネスコが人間宝のプログラムを実行し始めた。

しかしながらこの人間宝は減る一方で、今にも消滅の危機にさらされている。現在も活躍する人間宝を、どの分野に通じているのか特定し、探し出すことが必要だ。ジオパークにおける無形文化遺産の取り組みとは、このような人間宝を特定し、支援していくことである。この支援にあたっては、人間宝が持っている知識、技術を、次の世代に伝えていく手段、手法を生み出すことが必要である。

3つ目の聖なる場所、というのはどのようなものか。この聖なる地も、すべて保護すべき場所として保護されている。具体的には、協会、修道院、モスク、サンクチュアリなどであり、また別の定義として、水や土地であって、さらに特別な聖なる概念を持つものであって、ユネスコのIUCNの2008年の定義にかなうものについても聖なる場所として認めている。

この点について、隠岐での事例を紹介する。隠岐の西ノ島の由良比女(ゆらひめ)神社はイカを祭っている。この神社の前の浜に年に一

度、イカが寄ってくる。この現象は海岸の地質的な特徴と関連している。地域の人や神社の関係者が寄せるイカを捕らえる一方で祭る高位は、すばらしい無形文化遺産になると思う。

話しを変え、ジオパーク活動を通じた持続可能な発展について触れる。このことについては、パートナーシップを必要としている。そのジオパークの中にあるすべての利害関係者が参加することが必要、ということだ。これは公式的な協力関係が必要で、ある一定の質を満たす必要がある。

しかしながら、すべての店や博物館などが、一定の質を満たしているわけではないので、すべてが参加しないといけないわけではないが、糸魚川ジオパークの例(「ジオパークマスターのいる店」の認定制度)では、一定の資格を満たすと、ジオパークのシールをもらうことができ、店先などに掲示することができる。アロウカジオパーク(ポルトガル)にも同じような制度があるが、こういった制度は、誰にでも見えるものにしないと効果が薄い。

またジオパーク活動を通じた持続可能な発展を語る際に留意しないといけないことは、経済面で持続的な発展をするということだけではなく、ジオパークを活かしたブランドの育成が必要、ということでもある。つまり、ジオパーク活動を通じて、その地域の経済面の発展を支えるということに加え、その土地が作り出す価値を活用するという、2つの側面を持ったブランドを促進していくということである。

火山のカタラジオパーク(アイスランド)は塩を作っている。鮭だけではなく、たいへん重要な価値を生み出すブランドとしての塩がある。塩というのは鉱物であり、鉱物遺産を活用して作り出されたものである。

西ノ島でも海水から塩が作られていた。大変良質なものであり、隠岐ジオパークのひとつのブランドになるのではないかと感じた。

最後にまとめとなるが、ジオパーク活動は糸をつむぐことに似ている。私は地質学者であるが、ジオパーク活動に20年間携わり、自己紹介の際に「何をしていますか?」と尋ねられた場合、「機織りをしています。」と答えます。科学と地質学のつながりを編んでいく、そしてそれを地域の地質遺産と編んでいく、地球の記憶と人類の営みをつないでいく、そしてこれらのつながり通じて人類と地球のもともとのつながりを発見して、ここからさらに新しいジオパークのあり方を考えていく、このジオパークの概念は21世紀のユネスコが定めた新しい取り組みである。

私はここ隠岐の中でも、'discover connection'が使われており、とてもうれしく思った。まさにこれがジオパークの精神である。隠岐の島では地球と、生きとし生けるもののつながりを見つけることができる。すべてがこの島の中にある。

JGNの輝かしい未来と、そしてもっと多くのジオパークが生まれること、そして隠岐ジオパークの今後の成功と発展を祈念します。





分科会報告 首長セッション報告

【コーディネーター】中川 和之 氏（日本ジオパーク委員会 委員）／柴田 伊廣 氏（室戸ジオパーク）

これまでの全国大会では、参加された首長同士での交流を目的にした懇親会を開催していたが、今回はネットワークの繋がりを強くし日本のジオパークの活動全体のさらなるボトムアップを図ることを目的とした。そのため、事前アンケートを行った。対象は、JGN会員、準会員としてジオパークに取り組んでいる地域の全国158市町村の首長で、54市町村の首長からアンケートの回答を得た。アンケート内容は、「ジオパーク活動の手応えを感じた住民の声は?」、「手応えを感じた具体的な活動は?」、「さらに発展するためのキーワード」の3項目とし、当日集まった首長同士で、思いを共有できるような内容とした。当日のセッションに参加した地域は、31市町村から32人が参加し、うち首長は23人だった。まず、他の首長たちの生の声が集まっているアンケート結果を読み込んで、「共感できるところに線を引いてください」という課題に取り組んだ。自らの思いを代弁しているような54の首長たちの言葉に共感できる部分をチェックした後、自己紹介とともにチェックした内容を語りあうワークショップを行った。これによって、首長同士の思いの交換を行ってもらった。そして、皆さんに俳句を詠んでもらった。俳人としても著名な日本ジオパーク委員会の尾池和夫委員長から、俳句に必要な要素として「季語」「定型」「現在」という課題を頂き、全員が共に語らったことを俳句として表現した。セッションの最後に、JGNの米田理事長が「短い時間だったが有意義なコミュニケーションが出来た。これからもやりたい」とあいさつして、セッションは終了した。参加者が詠んだ俳句は、その後の交流会の会場に掲示され、参加者が気に入った俳句に「いいね!」シールを貼って、首長たちと思いを共有した。交流会の最後に、ジオ俳句の中で「いいね!」が多かった俳句に、尾池JGC委員長がコメントを加えたほか、マルティニーニ氏が詠んだ英語の俳句と、尾池委員長の意識も紹介された。



●ジオパーク 各地の話題に 熱い秋 【34いいね!】

●神無月 ジオさち集う 隠岐の島 【33いいね!】

●Tempest is coming. Squids are jumping from the sea.
We will eat them .. Mmmm
(訳)野分波 烏賊は飛び込む ジオの皿 (マルティニーニ 氏／尾池 氏 意訳)

米田理事長の発言を受け、今回の分科会のコーディネーターとして、第5回の全国大会にも、さらに意義がある首長同士の意見交換などが出来るよう、首長セッションの共有を行い、アンケート結果をさらに分析をして、首長同士の交流を促進できるように支援していこうと考えている。



首長セッション参加者の俳句

- | | | |
|--------------------|--------------------|-----------------------|
| ●ジオパーク 各地の話題に 熱い秋 | ●隠岐に来て ジオの仲間と 語り合う | ●慶びで 紅く染まる葉 隠岐の島 |
| ●神無月 ジオさち集う 隠岐の島 | ●すすきの穂 住んでる町を 再発見 | ●子供等が 大きく羽ばたく ジオパーク |
| ●夕べの日 隠岐の海への お年玉 | ●秋深し 数えてみよう ジオの恵み | ●白波に ジオの種多し 隠岐の島 |
| ●大地から 世界をつなぐ 隠岐の緑 | ●隠岐の島 見どころ一杯 ジオパーク | ●認定は ボイ捨て無くなる その日から |
| ●ジオパーク 認定ねがい 隠岐に来る | ●山もみじ 南アにつどい 夢めざす | ●爽やかな 季節は歩こう 我島を |
| ●台風に 負けず自熱 隠岐大会 | ●台風を 乗り越え大きな 喜びを | ●秋の空 熱き意見も 風となる |
| ●隠岐の風 波を起こして 秋過ぐる | ●野分け来る わには並ばぬ 隠岐の海 | ●四季にあり 未来につなぐ 命かな |
| ●誰れ知らず 錦秋の岩 ジオ祝う | ●ジオパーク 隠岐の四島も 秋の空 | ●ジオパーク 子どもたちが伝え 元気になる |
| ●ジオパーク 愛郷心が まち創る | ●白イカ ジオの調理で 堪能す | ●輝かしい 世界への光 秋の隠岐 |
| ●初雪や いのち育む 隠岐の島 | ●紅葉ふみ 歩む谷間に 岩輝る | ●風穴と 乳房杉拌み 涼しかな |
| ●秋の隠岐 語るジオへの 熱いもの | ●隠岐で会い 語らいも外に 台風進路 | ●新米を 藻塩でにぎる ジオパーク |



無形文化財を取り入れたジオパーク活動

【コーディネーター】柚洞 一央 氏（室戸ジオパーク）／新名 阿津子 氏（山陰海岸ジオパーク）／ギー・マルティニーニ 氏（GGNビューロー）

1. 趣旨

全国各地においてジオパーク活動が急速に広がっている一方、ジオパークは地学が主体で難しいといった声も聞かれている。こうした状況の中、世界ジオパークネットワークでは、2011年に無形文化遺産ワーキンググループが立ち上がり無形文化遺産リストの作成や”living human treasure”選定に向けた活動が始められている。日本においては、2012年に開催された日本ジオパークネットワーク室戸大会から議論が始まり、国内版のワーキンググループが設立された。ジオパークは地球を舞台に繰り広げられる生命の物語を伝える「大地の公園」であり、無形文化遺産を導入することによりジオパークの可能性を更に広げられることから、GGNで無形文化財を取り入れたジオパーク活動を提唱しているギー・マルティニーニ氏を交え、無形文化財を取り入れたジオストーリー作りに取り組んだ。



コーディネーターの方々

2. グループワーク

自分たちのジオパークの「大地の特徴」を一言で説明し、その特徴を説明するために活用できる「農林水産業・食文化」「職人の世界（地場産業、伝統的産業）」「自然思想（言い伝え、ことわざ）」を課題テーマとして、大地の特徴と無形文化財とのつながりを見つけ出しながら各ジオパークのストーリーづくりを行った。

3. 事例報告

無形文化財などを取り入れたジオストーリーづくりの参考として、白山手取川ジオパーク、八峰白神ジオパーク、隠岐ジオパークの3地域からの事例紹介を行った。

日比野 剛（白山手取川ジオパーク）

雪で真白な白山は象徴的な存在である。雪解け水は手取川から日本海、再び白山へと巡るなかで地域を潤し、様々な文化・産業が生まれている。白山や日本海を形成し現在の地形を作り出した大地の物語には、水の旅と石の旅があり、そのなかで人々の生活が生まれた。白山は、古よりこの地域の水や暮らしへの感謝の対象で、その念は意識として根付いている。これもジオパークの資源であり、地域はジオパークに生きてきたと考えている。

神垣 恭彦（八峰白神ジオパーク）

地域内の宗教文化の歴史と、地形・地質の成り立ちとの関係性について一例を紹介する。境内地に滝をもつ「白瀑神社（しらたきじんじゃ）」は、かつては山岳仏教や修験道の一大聖地だった。滝があったことにより地域に宗教文化がもたらされたともいえるが、その滝がどのようにしてできたのか地質・地形の面から考える。また大地との関わりのなかで古来より育まれてきた日本人の自然観や宗教観についても触れた。

斎藤 一志（隠岐ジオパーク）

地質的な見どころや隠岐独自の建築手法、食文化、離島であるが故に遺された珍しい祭りを紹介し、河岸段丘などの地形との関係や火山ガラスである黒曜石を媒体とした人・文化交流の歴史。隠岐の地理的特徴によって北前船の寄港地として隠岐が栄えたこと、隠岐独自の相撲文化や牛突きについて地理的位置や対馬暖流など、それぞれの無形文化財が生まれた要因についてその背景となるジオとのつながりについて紹介した。

コーディネーターの感想／柚洞 氏

自分たちのジオパークの地形地質遺産の特徴を説明できる人が意外と少なく、日本そして世界ジオパークの中で自分たちのジオパークの個性は何かをちゃんと理解することを進めていく必要を感じた。ジオパーク活動に無形文化財などの人の暮らしを取り入れていくことは必要であるが、大地の特徴と人の暮らしが密接にかかわっているということを理解するためには、まだ時間がかかりそうだという印象を受けた。

コーディネーターの感想／新名 氏

参加者自身のジオパークにおける「ジオ遺産」、地形地質的な「売り」とそれに関連する事例を挙げて繋げていくことを試みた。テーマが進むにつれて事例が挙がらなくなり、土地と文化の関係について説明することに苦労した参加者が多くいた。今後、ジオパークで地球と地球を舞台に繰り広げられる生命の物語を語るためにも、事象を羅列して満足せずにその内容を理解し充実させていく必要があると感じた。



ジオパークガイドの交流・意見交換会

【コーディネーター】福島 大輔 氏(桜島・錦江湾ジオパーク)／西谷 香奈 氏(伊豆大島ジオパーク)

1. 趣旨

各ジオパークの魅力を伝える人としてジオパークガイドの存在は大きな役割を果たしているが、一口にジオパークガイドといっても現状としては組織体制やジオパークに対する考え方もそれぞれである。ジオパークガイドを育成していく上で、それぞれが抱える課題解決や今後の方向性について意見交換を行った。

■ガイド分科会の流れ

パネル ディスカッション (導入編)	小分科会 (グループ討議)	各グループ発表 (発表時間2分)	パネル ディスカッション (まとめ)
30分	2時間	30分	30分



2. 全体討議

各小グループに分かれて討議を行う前に、導入編としてとして松原典孝氏(山陰海岸ジオパーク)、西谷香奈氏、伊藤延広氏(磐梯山ジオパーク)、斎藤正幸氏(隠岐ジオパーク)から、「良いガイドとは」をテーマに、ガイドに必要な要素やガイドの育成についてそれぞれの経験から事例を紹介し意見交換を行った。

3. グループワーク

10グループに分かれて、全体討議で出された事例や意見をもとに「ガイドのスキル」「ガイドの組織」「ガイドの料金」「ガイドの養成」をテーマとして意見交換を行いグループ毎の意見をまとめた。



4. 各グループからの発表(まとめ)

ガイドの養成	ガイドのスキルアップ	ガイドの料金	ガイドの組織化
養成に関しても、ガイドが運営に関わる体制づくり。	ガイド結果のフィードバックのシステム作りを行う。	ガイドの質を確保して料金を取るようにする。	ガイドが運営に関わるような組織作りを行う。

5. 総合討議

各グループからの発表をもとにパネラー(松原典孝氏、西谷香奈氏、伊藤延広氏、斎藤正幸氏)による討議を行い、ガイドのスキルや仕組みに関する事例について、全国、地域など、様々な領域での情報共有の機会を増やし、各地域でのジオパークガイドのレベルアップに活かすことを確認した。

コーディネーターの感想／福島氏

大会前に行ったアンケート結果から、ガイドの手法や内容、ガイドの養成や組織について課題を抱えている地域が多いことがわかった。「良いガイドとは何か?」を定義することによってガイドに必要なスキルを明らかにし、そのスキルを取得・向上させるための養成講座や組織のあり方について分科会の内容を検討した。

パネラーの感想／斎藤氏

分科会を通して、ジオパークにおけるガイドの組織化の必要性を感じました。現在は、単独活動としてガイドをおこなっている場合が多く、ガイドの内容、リスク管理を含めて、ジオパークとしてガイドを行う場合にその組織が必要であるが、組織化には時間がかかるのではないかと思います。



大山隠岐国立公園隠岐島地域指定50周年記念イベント

「自然公園とジオパーク～よりよい連携を目指して～」

結果概要

■日時／平成25年(2013)10月16日(木)9:00～11:45 ■場所／隠岐の島町ふれあいセンター2F会議室
■参加者数／117名 ■主催／環境省中国四国地方環境事務所 ■共催／日本ジオパーク隠岐大会実行委員会

1. 趣旨

日本の自然公園(国立公園、国定公園、都道府県立自然公園)とジオパークは、自然環境の保全と利用の双方において共通点があり、各地で連携した取組が始められている。このため、さらなる連携の強化を目指して、全国の連携事例の紹介や連携の課題解決に向けた意見交換等をおこなった。

2. 基調講演

「自然公園とジオパーク」一般財団法人自然公園財団 専務理事 阿部 宗広 氏

(1) 自然公園とジオパークの現状

- ◎日本にある世界及び日本ジオパークうち9割(27/32地域)が国立及び国定公園区域と重なっている。
- ◎自然公園とジオパークはお互いの目的や内容に共通点が多い。
- ◎自然公園においては、これまでに地質的に重要な地域の法的な保全、利用施設の整備、モデルツアーの立案・試行などの事業が進められており、今後もジオパークとの連携を想定した事業展開を図っていく。

(2) 自然公園とジオパークの連携のメリット

- ◎自然公園がジオパークと連携するメリットとして、地形・地質に関する公園の魅力発信を充実・強化できる点及び地域との連携・協働を促進できる点が考えられる。
- ◎ジオパークが自然公園と連携するメリットとして、自然公園事業を活用した施設整備やプログラム作成等、活動をより充実・強化できる点が考えられる。



3. 隠岐ジオパーク

「国立公園をフィールドにしたジオパークの取り組み」隠岐ジオパーク戦略会議 会長 八幡 浩二 氏

- ◎隠岐世界ジオパークは、大山隠岐国立公園隠岐地域と重複しており、隠岐ジオパーク戦略会議(民間組織)が隠岐ジオパーク推進協議会(行政組織)と連携しながら中心的な役割を果たしてきたボトムアップの取り組みが特徴である。
- ◎具体的には、国立公園をフィールドにした自然体験学習、地質、動植物等の調査・研究、海岸清掃や外来種駆除等の保全・保護、ジオツアーを実施している。特に保全・保護分野には力を入れている。
- ◎世界ジオパークの認定、国立公園指定50周年などを契機に、地域を良くしていきたいという共通の目的をもって、新設された隠岐自然保護官事務所で意見交換会を定期的開催しながら連携を図りたい。

4. 意見交換

(1) 自然公園とジオパークの連携に関するアンケート結果報告

- ◎アンケートは、NPO法人日本ジオパークネットワークの正会員及びジオパークへの登録を目指す準会員計44団体を対象に実施し、42団体から回答を得た。
- ◎アンケートの結果、90%以上のジオパーク(候補地含む)が自然公園区域と重複しており、多くのジオパークが自然公園の保全・保護をはじめ、多岐にわたる分野で連携を望んでいることがわかった。
- ◎一方、自然公園に関する情報不足、公園区域内の規制の煩雑さ、保護と利用に関する計画の不整合など、連携の課題も挙げられ、これらの課題の解決が今後の連携深化のヒントになると考えられる。



5. まとめ

自然公園とジオパークの双方が連携を深めていくことについて共通認識を得るとともに、連携の内容や進捗度合いに地域ごとの違いはあるものの、それぞれの地域に応じた連携を進めていきたいと、参加者が認識を新たにした。また、今後も継続して意見交換の場を設けることを期待するとして閉会した。



隠岐の島町立北小学校の発表

北小学校5、6年生を代表して、6人の児童が、7月に環境省事業「子どもパークレンジャー」で隠岐世界ジオパークをテーマに学習したことを次のとおり紹介した。

隠岐世界ジオパークの特徴である、「大地の成り立ち」「独自の生態系」「古代から続く人の営み」について、教室での学習だけでなく、屋外で黒曜石の加工体験や、植物観察、火おこし体験や海水からの塩作りなどを体験した。

この体験を通じて、隠岐の人々が豊かな自然をうまく活用しながら生活してきたことを実感し、このすばらしい隠岐の自然を将来に残し、伝えていきたいと思った。



島根県立隠岐高等学校の発表

隠岐高校からは、2件の発表があった。

①科学情報部「隠岐の化石調査」

島内の化石調査を通じて、地層（岩石）の種類と、各地層で発見できた化石（海生貝、魚の骨など）の関係を整理した。ここから、隠岐がかつては海であったことを発見するとともに、隠岐の歴史を知ることができる化石が身近にある地域であること実感した。

②オーストラリア英語研修参加生徒「隠岐ジオパーク世界発信に向けて」

2月から3月にかけて、国際交流と英語の研修（ホームステイ）に参加した生徒から、研修中に行った隠岐ジオパークの情報発信を行った。今後も英語を通じて隠岐の情報発信を続けたい。



大会宣言

ジオパーク活動に対する関心が国内外でますます高まってきているなか、ここ隠岐において、ジオパークにおける活動の更なる発展と各ジオパークの活性化について幅広く意見交換、議論を行った。この大会で、議論した内容を踏まえ、今後のジオパークの発展のために以下の事項をここに宣言する。

- 一 無形文化財や地域の歴史は、ジオパークの価値をさらに高めるものであることを学んだ。私たちはそれらと地形・地質とのつながりを見つけ出し、いくことによってジオパークの価値を高めていく。
- 一 ジオパークでは、革新的な取り組みをすすめる。
- 一 日本のジオパークの初期の取り組みを振り返り、ボトムアップの重要性を再確認した。
- 一 ジオパークは各地域に切望されていることを作りだす力がある。首長同士のコミュニケーションは、これからも非常に大切であり、首長でしかできない互いの経験を共有し、発信していく。
- 一 ジオパークでは、それぞれの場所で地球という惑星を語り、世界の中の日本を伝える必要がある。「地球の記憶(Memory of the Earth)」の保全をすすめ、その価値を高め、その重要性を伝えるために、無形文化財を含めた、食・技術・思想といった人の営みの要素を用いる。
- 一 ガイドのスキルや仕組みに関する事例について、全国や地域など、様々な領域での情報共有の機会を増やし、各地域でのジオガイドのレベルアップに活かす。
- 一 ジオパークと自然公園との関係は、その内容や進捗度合いに違いはあるが、よりよい連携を目指し、それぞれの地域に応じた活動を進めていく。

2013年10月16日

日本ジオパーク隠岐大会実行委員会 委員長 松田 和久

次回開催地(南アルプスジオパーク)PR

第5回目となる、次回の全国大会の開催地、南アルプスジオパークから、次のとおり開催概要が示されるとともに、参加の呼びかけがあった。

■開催期日／2014年9月27日(土)～30日(火)

■開催場所／長野県伊那市(メイン会場)、飯田市、富士見町、大鹿村

開催コンセプト

「山岳と人とジオパーク」国内最大級の山岳ジオパークとして、登山者に対するジオパークの発信を行い、山あいの集落で培った人の文化や歴史とジオパークの関係について考え、そして来年迎える南アルプス国立公園50周年を契機に、ジオパークとしての利用を考え、全国へ発信していく大会。





日本ジオパーク隠岐大会が10月15日から4日間、島根県隠岐の島町を主会場に開かれた。全国各地から集まった、日本ジオパークに加盟する地域の約400人は大会を通じ、地球の歩みを実感できる貴重な地形・地質、独自の生態系、豊かな自然が育んだ歴史、文化を学び、後世に伝える活動の意義を再確認した。同時に、9月に世界ジオパークに認定され、喜びに沸く隠岐世界ジオパークの魅力を感じた。



隠岐の小学、高校生 研究成果発表

「誇り」継承へ故郷学ぶ
隠岐世界ジオパーク「独自の生態系」「人しや十割による地づくは、わたしたちの誇り」の想いについて勉強して、古くの人々の生活です。大会では、地質・地形・生物・文化の魅力を学び、後世に伝える活動の意義を再確認した。同時に、9月に世界ジオパークに認定され、喜びに沸く隠岐世界ジオパークの魅力を感じた。

要望に応えるガイドに 魅力アップへ意見交換

分科会では、参加者が三つの課題ごとにパネルディスカッションなどを通じ、活動やガイド風景をビデオ撮影し、点検を促す意見などが出された。このほか、市町村長らによる「首長セッション」と、「無形文化財を取り入れたジオパーク活動」をテーマとした分科会があった。また、関連イベントでは、大山のバネリストが「良いガイドとは」をテーマに講演した。隠岐世界ジオパークのガイドを務める斎藤正幸さん(33)＝隠岐の島町＝は「お客さんのニーズに応えられる人が求められる」と強調。「何を売りにしていくかを把握する

自然が育んだ宝 後世に

日本ジオパーク隠岐大会

地球、人類の記憶つなぐ島
大会は、世界ジオパーク委員会のメンバーである、ギニー・マルティニ氏が「無形文化財とジオパーク活動」をテーマに講演した。同氏は世界ジオパークネットワークの創始者の一人で、貴重な地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。ジオパークの活動は、物を訪ねていくのではなく、地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。ジオパークの活動は、物を訪ねていくのではなく、地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。

隠岐の歴史と文化
大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。

新たに7地域認定 計32に
日本ジオパーク隠岐大会では、日本ジオパーク委員会が新たに国内7地域を日本ジオパークに認定した。これにより、日本ジオパークの数は計32に増えた。認定された地域は、三陸(岩手県・宮城県)、佐賀(佐賀県)、四国(高知県)、おおい(大分県)、おおい(大分県)、おおい(大分県)、おおい(大分県)。

自然が育んだ宝 後世に

日本ジオパーク隠岐大会

地球、人類の記憶つなぐ島
大会は、世界ジオパーク委員会のメンバーである、ギニー・マルティニ氏が「無形文化財とジオパーク活動」をテーマに講演した。同氏は世界ジオパークネットワークの創始者の一人で、貴重な地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。ジオパークの活動は、物を訪ねていくのではなく、地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。

雅な文化 現代に根付く
大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。

岩松氏(岩手県)を功労者表彰
大会では、日本ジオパークネットワークが国内での普及活動に多大な貢献があったと、岩手県岩松氏(75)を功労者表彰した。岩松氏は2007年、同ネットワークの前身となる日本ジオパーク連絡協議会の設立に尽力。国への働きかけや、マスコミへの活動の紹介など、組織発展の基礎を築いた。表彰状を受け取った岩松氏は「(ジオパ

ジオパーク 活用の振興策探る

分科会や意見交換

大会で、分科会や意見交換が行われ、ジオパークの活用策が探られた。分科会では、参加者が三つの課題ごとにパネルディスカッションなどを通じ、活動やガイド風景をビデオ撮影し、点検を促す意見などが出された。このほか、市町村長らによる「首長セッション」と、「無形文化財を取り入れたジオパーク活動」をテーマとした分科会があった。また、関連イベントでは、大山のバネリストが「良いガイドとは」をテーマに講演した。隠岐世界ジオパークのガイドを務める斎藤正幸さん(33)＝隠岐の島町＝は「お客さんのニーズに応えられる人が求められる」と強調。「何を売りにしていくかを把握する

三陸など7地域に ジオパーク認定証
大会で、日本ジオパークネットワークが国内での普及活動に多大な貢献があったと、岩手県岩松氏(75)を功労者表彰した。岩松氏は2007年、同ネットワークの前身となる日本ジオパーク連絡協議会の設立に尽力。国への働きかけや、マスコミへの活動の紹介など、組織発展の基礎を築いた。表彰状を受け取った岩松氏は「(ジオパ

国立公園と連携
大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。

隠岐で全国大会開幕

全国47地域から500人参加

大会は、世界ジオパーク委員会のメンバーである、ギニー・マルティニ氏が「無形文化財とジオパーク活動」をテーマに講演した。同氏は世界ジオパークネットワークの創始者の一人で、貴重な地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。ジオパークの活動は、物を訪ねていくのではなく、地質・地形や生態系、その地の特性を結びつけてきた。

国立公園と連携
大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。

国立公園と連携
大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。大会では、松江歴史館館長 最も古い配流地の一つに隠岐の歴史を語り継ぐ。隠岐の歴史は、古くから人々の記憶に刻み込まれてきた。